競争的研究資金獲得力向上経費・展開研究資金

研究代表者	所属・職名　人間発達文化学類　教授 氏　　名　佐久間　康　之
研究課題	小学校外国語活動の実施に伴う学習者の意識と音韻認知能力の特徴：現状と課題
成果の概要	研究目的としては、小学校外国語活動の実施に伴う指導の効果と中学校への接続の現状と課題について、英語教育学におけるマクロ的視点と認知心理学におけるミクロ的視点の統合化により、小学生及び中学生の音韻に関する認知発達的特徴について、多くの多様な学習者を対象に明確にしていくことを掲げた。しかしながら、現実的には、対象者（児童や中学生となった学習者）へ英語に関する心理的要因（動機、興味・関心、記憶ストラテジー等）に関して５件法によるアンケート調査を行ったに留まり、データの一部を分析し終えた段階である。 調査対象の小学校はクラス担任が外国語活動を熱心に実施しており、高学年の児童の半数以上は学校以外（私塾や家庭等）で英語を学習している現状にあった。また、この小学校のほぼ全員の児童が同じ一つの中学校へと進学しており、一部、他の出身小学校から中学校に入学する生徒がいるものの、比較的、小学校と中学校との接続が安定している学校であった。アンケート調査は、小学生を対象に同年度内に約10ヶ月のスパンを空けて前後で１回ずつ同一内容のものを実施し、外国語活動における変容を調査した。また、小学校と中学校の接続の視点から、小学生が中学校に入学した２ヶ月後位に同一学習者が小学校時代に回答した内容とほぼ同一項目（中学校での学習項目と異なる項目は除外）を回答してもらいその変容を調査した。その際に、他校出身の小学生と区別するため、出身小学校の明記を回答に求めた。 今回は学校以外での英語学習の有無が混在する状況下での外国語活動の現状把握の視点からデータ分析が済んでいる以下の点を報告するに留める。 ５学年において、学校以外での学習も含む児童のほうが、英語に対し、好意的、積極的に受け止めており、日本語と英語の語順にも気づいている。記憶のストラテジーとして、速く発音される箇所への注意や英語を繰り返すリハーサルを使用している。また、日本語で積極的に話せる（コミュニケーション能力の素地ができている）子どもは、英語でも積極的に話せる傾向が見られている。これらの結果は、原因として、学校以外での英語のインプット量の増加及び意識的な知識学習が英語及び英語に付随する様々な知識の習得にさらなる相乗効果を生んでいるものと推察される。その一方で外国語活動の目標の一つである異文化理解に位置する「非英語圏への興味・関心」は特に差が見られない。英語を通して、非英語圏の文化にも興味・関心を抱かせるグローバルな視点に基づく指導も重要と言える。 ６学年においては、学校以外での学習者のほうが、５年生同様、全体的に好意的、積極的に受け止めており、主な正の効果は次の三点である。一点目は、英語を駆使して行いたい項目が増加しており，英語への様々な形での接触量の増加に伴い，学習者の意識も向上してきているものと推察される。二点目は非英語圏への興味・関心も生まれている。この原因については不確かであるが、少なくとも、子どもたちの世界観が広まっていることは確かである。三点目は英語を記憶する際の認知レベルの発達である。速く発音される箇所だけでなく、ゆっくり発音される箇所にも注意を向けるようになっている。これは音声の様々な特徴にも気を付けるようになったものと解釈される。また、日本語と英語との類似音の覚えやすさを意識していることから、何らかの精緻化ストラテジーを使用している可

成果の概要	能性がある。この点で、６年生は５年生が使用している初歩的なストラテジーであるリハーサルよりも高度な記憶ストラテジーを使用していると言え、英語の学習期間の相違のみならず認知発達の点からも注目に値する。外国語活動や学校以外での英語学習により、５年生に比べ学習年数、英語のインプット量が増加することで、語彙数や英語の処理プロセスの効率に関して何らかの発展的変容が生起したものと推察される。